

# 九州の縄文時代包含層の構造

―特に縄文時代早・前期を中心に―

一、はじめに

現在、南九州の縄文時代包含層を検討する場合、新期火山灰の研究をぬきには考えられない現状である。

新期火山灰の研究は、町田洋・新井房夫氏らによって始良<sup>1)</sup>火山灰(AT)・アカホヤ火山灰(K-Ah)の広域火山灰としての認定を契次に急速な発展を遂げた(町田・新井一九七八)。

そして、現在、成尾英仁、小林哲夫氏は、この二大広域火山灰の成果を深めながら、桜島や指宿地方などの小規模な火山灰堆積物の詳細な調査を行ない綿密な分布図が作成されつつある(成尾一九八三)。

南九州の考古学研究も、これら火山灰の研究を応用しながら急速な発展を遂げたといっても過言ではない。特に、縄文時代の鍵層となったアカホヤ火山灰(K-Ah)の認定によって、縄文文化編年の画期的な成果をもたらした。第一の成果は、曾畑式・轟式土器文化の編年位置の確立であり、文字どおり「層位は型式に優先する」かたちとなった。

今後の考古学の調査は、火山灰層の詳細な確認に伴って、火山灰層(無遺物)間に発達した腐植土層形成の解明が最も重要な課題と考える。一つには、腐植土層の形成年代であり、年代の幅であろう。二つには、腐植土層の形成過程であろう。

これら腐植土層中に存在する包含層の構造について、河口貞徳氏の次のような重要な指摘がある。

「―略―層序は正しく上下の転例などはみられないが、出土状況を見ると、一個体または一型式の土器が破片となって垂直方向に上下に移行し、また、水平方向に拡散している現象が例外なく認められる。この現象は本遺跡にかぎられたものではなく、われわれが発掘調査を行なう場合、殆んどの遺跡で見られるところである。

ここにいう土器の垂直・水平移動は、局部的・人為的なものではなく、遺跡の全域に渡るもので、自然的原因によって生じたと思われるものである。われわれは調査を行なうたびに、この現象に直面しながら、その原因についての究明と処置法についての考察を怠っていたように思う。」(河口一九八〇)

このような包含層の把握は、河口氏の指摘のように発掘調査の成果によって与えられる部分が多い。幸い、最近の大規模な発掘調査の積み上げによって多くの資料が蓄積されるに致った。

ここでは、火山灰層間に発達した腐植土層(包含層)の構造についてこれまでの発掘調査の成果から検討してみたい。

## 二、南九州の火山灰と縄文時代の基本的層序

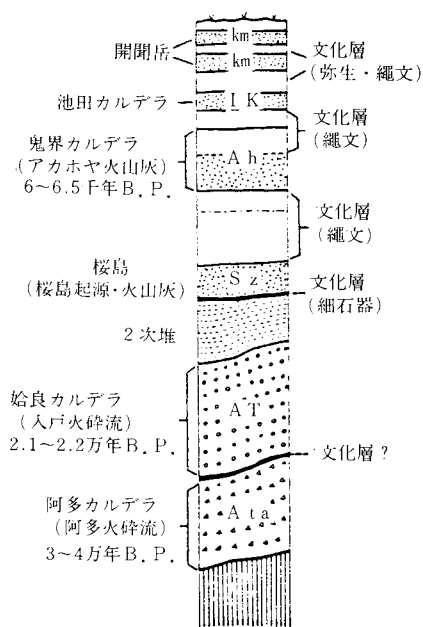
南九州は、阿多カルデラ・始良カルデラ・鬼界カルデラの三大火口が位置し、給源地に近いところから整然とした厚層な火山灰層の堆積が各地で認められている。

さらに、三大火山灰層のほかに、桜島・池田湖・開聞岳などの噴出火山灰層の詳細な分布域が調査されつつある（成尾一九八三）。

これまで確認されている火山灰層と文化層の関係は、古い方から順に並べると次のような形の層序関係が判明している（第1図）。

阿多カルデラから噴出した阿多火砕流（Ata）は、溶結凝灰岩であり、C<sup>14</sup>年代によって三〜四万年B.P.の噴出年代が得られている。

次の始良カルデラの噴出物は、大隅降下軽石（Osp）・入戸火砕流（Ita）・始良<sub>10</sub>火山灰（At）に細分され、下位の阿多火砕流を不整合に



第1図 南九州の火山灰柱状図

被って堆積している。噴出年代は、二万一千〜二万二千年B.P.が得られている。始良<sub>10</sub>火山灰（At）は、全国各地で相次いで検出され、広域火山灰であることが認定されるにいたった（町田・新井一九七六）。上層からは、旧石器を包含する文化層が検出され、旧石器時代の重要な示準層として取り扱われている。

つづいて、南九州では、薩摩火山灰（Sp）と呼ばれる火山灰・軽石層の堆積が確認されている。薩摩火山灰（Sp）は、薄層理火山と呼ばれていたもの（大木・早坂一九七〇）で、桜島を噴出源とし、一一〇〇〇年B.P.の噴出年代が得られている。特に、旧石器時代終末期の細石器文化包含層を被う火山灰・軽石層であり、降下配面は南九州に限定されるが、縄文時代と旧石器時代を層分する示準層となっている。

この薩摩火山灰の上部に鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰（K-At）層が堆積し、この間の厚く発達した腐植土層は、縄文時代の包含層となっている。

アカホヤ火山灰は、幸屋降下軽石（Kyp）・幸屋火砕流（Ky）・アカホヤ火山灰（Ah）に区分され、その降下年代は、六三〇〇年B.P.前後が得られている。このアカホヤ火山灰は、広域火山灰として認定され、縄文文化編年に示準層が加わり大きな成果が得られた。

薩摩火山灰（Sp）層とアカホヤ火山灰（Ah）層の間には、平均四〇〜五〇cmの部厚い腐植土層が形成され、多型式の縄文土器を含む包含層が存在し、さらに、アカホヤ火山灰層直下には霧島山系南麓を中心に青灰色の火山灰堆積物（牛のスネ火山灰）が確認され（注1）、この層に塞ノ神式土器の一群が包含されることが判明されつつある。発掘調査に

においても溝辺町桑ノ丸遺跡や加世田市柗ノ原遺跡などで下層と分離された状態で塞ノ神式土器包含層が確認されている。

下層は、押型文土器・捺糸文土器のほか石坂式・吉田式・前平式土器の円筒土器群などの南九州縄文時代早期の包含層となっている。

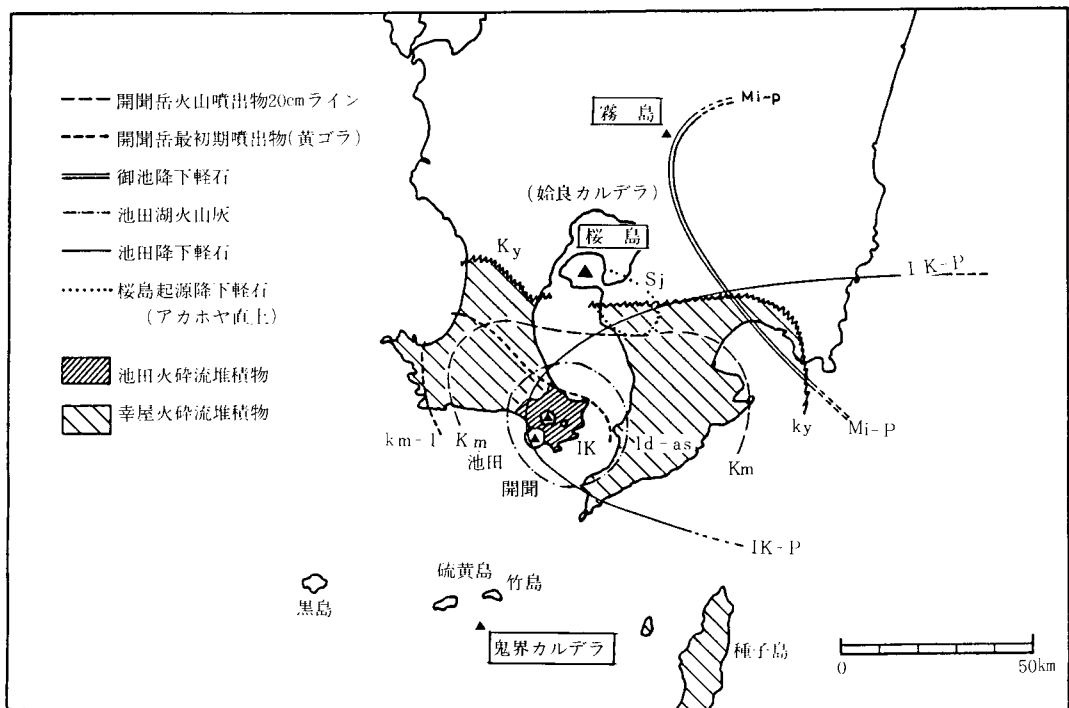
なお、桜島の東方にあたる輝北町や百引町付近で、この包含層間に3〜4本の薄い黄褐色火山灰層が確認される場所がある。この火山灰の給源地は桜島と推定されるが、今後、噴火規模や降下範囲など詳細な調査が要求される火山灰層である。特に、多型式の縄文土器包含層を細分する貴重な火山灰層となる可能性が高い。

アカホヤ火山灰（K-Ah）層の上位は、指宿地方や大隅半島中・南部を除いてはアカホヤ火山灰を母胎にした腐植土層が発達している。指宿地方や大隅半島中・南部においては、アカホヤ火山灰層の腐植土層の上部に池田湖カルデラ噴出の池田湖軽石層が堆積している。

池田湖軽石層の年代は、松井健氏によってその下層の腐植土層中から四六〇〇±八〇年BP（GaK584）のC年代測定値が得られている（松井一九七三）。以上の結果から下部のアカホヤ火山灰層と上部の池田湖軽石層間の腐植土層の年代は、さらに限定されるものとなるが、現在のところ腐植土層中からは縄文土器は発見されていない。しかし、調査が進めば限定された時期の縄文土器が出土する可能性がある。

さらに、指宿地方では、池田湖軽石層の上部に開聞岳関係の火山灰・軽石層の堆積がみられる。

この開聞岳火山灰層最下部の黄褐色火山灰の風化部とそれより上部のコラと呼ばれる粗粒火山灰層の県下黒色腐植火山灰の2点（試料はいず



第2図 南九州の火山・火口 (原図 成尾英仁1984による)

れも火山灰)からC年代測定値が得られている(古川・中村一九六九)。前者は三六二〇±一四〇年B P (GaK1240)、後者は三五二〇±一〇〇年B P (GaK1241)であった。

さらに、最近、成尾英仁氏は、開聞岳噴出物を「黄ゴラ」、「暗紫ゴラ」、「青ゴラ」、「紫ゴラ」の四種に区分し、その間の腐植土層の発達や縄文土器・弥生土器の関係を追求している(成尾一九八三)。

### 三、縄文時代包含層の垂直的な実態

南九州の縄文時代の基本的層序については前項ですでに述べたとおり、アカホヤ火山灰(K-Ah)・池田湖軽石層(IP)・開聞岳火山灰(Km)層が、その間に発達した腐植土層とサンドイッチ状に整然と堆積している。しかし、火山灰層の堆積状況は、その噴火規模において降下範囲が異なり、地域においては若干の相異がみられる。また、火山灰の上・下に発達する腐植土層も、火山灰の降下範囲に影響するところが大きい。幸い南九州では、アカホヤ火山灰(K-Ah)をはじめ多くの火山灰で縄文包含層が区分され、発掘調査に伴って事例が増加し、包含層の実体が伴明されつつある。

ここでは、包含層内の状況について垂直的な構造を検討されたものを見てみたい。

#### ①アカホヤ火山灰(K-Ah)層下位の包含層

アカホヤ火山灰層が厚く間断なく堆積した南九州では、その下位に、四

〇cm前後の厚い腐植土層が形成されている。そして、この腐植土層内には縄文時代の包含層が存在し、多型式の縄文土器が出土している。最近の調査では、この包含層を上層と下層に分離できる遺跡が存在し、上層に塞ノ神式土器が出土し、下層に他の多くの型式が出土することが確認されている(注2)が、ほとんどの遺跡では、各型式が同一層内から出土している。これまでのところ、この包含層から出土する土器型式には、押型文系土器(燃糸文・手向山式土器を含む)、円筒形土器(石坂式・吉田式・前平式・円筒形条痕文土器など)、平楯・塞ノ神式土器など十数型式におよんでいる。

これまで、この包含層は数型式の土器を含むことから、一般的には出土する土器型式を伴する資料として組み立てる場合が多かったようである。

#### 〔事例1〕熊本県干無田遺跡の包含層(緒方一九七〇)

干無田遺跡は、熊本県上益城郡御船町干無田に所在する。昭和三八年、緒方勉氏によって表面採集と試掘がおこなわれ、Ⅲ層包含層から押型文土器など4種の土器型式が出土している。

層序は、第3図のとおりである。「第Ⅱ層は黄褐色粗鬆な火山灰土である」とあり、記述の内容から現在確認されているアカホヤ火山灰であることが推定される。

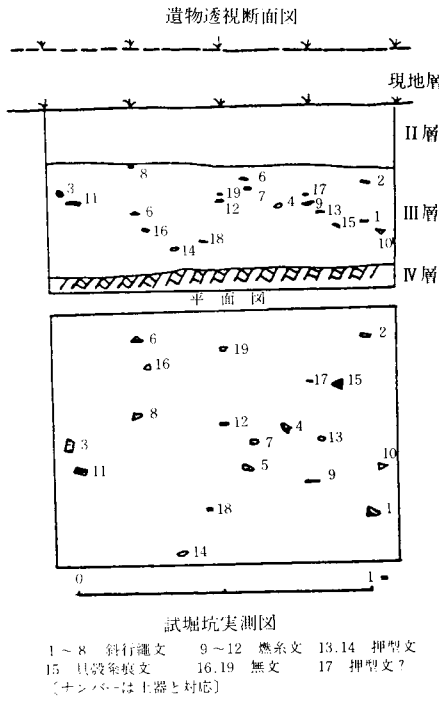
この調査で特筆すべきことは、一×一、二mの小試掘坑内の第Ⅲ層包含層出土の総数十九点の縄文土器の垂直分布の検討であろう。その中で、1~8は同一体の斜行縄文土器であり、1~3は接合する。9~12は同一体の網目状燃糸土器である。13・14は楕円押型文土器の同一破片で

ある。15は貝殻条痕文土器であり、その他は無文土器である。  
緒方氏は、この包含層の現象について、

「一略—土器は第Ⅲ層の上面近くから、その下面近くまでと、また横への拡がりをもって散乱していた。土器出土時の相互のからみあい(第3図)からして、これら4種の土器の共体性を考えてよからう。ただ何故にこのような土層内における土器の沈積をみるに至ったか、充分な解答は与えられないが、それは地学的知識の上にしたっての検討を必要としよう。」と指摘されている。

さらに、「まとめ」の項で

「遺跡の小地域から以上に挙げた4種の土器が一括している。これらの土器は器形の様態が、口縁部は外反し、一旦窄まりながら胴部がふくらむ、という点において共通性がある。また遺跡地における遺物の包含状態からしても、その共伴遺物としての可能性が強い。」



第3図 干無田遺跡の包含層 (緒方1970より)

と述べられている。

わずか一、二㎡の小面積の発掘調査であるが、遺跡における包含層内の遺物の在り方を問題にした調査報告であろう。

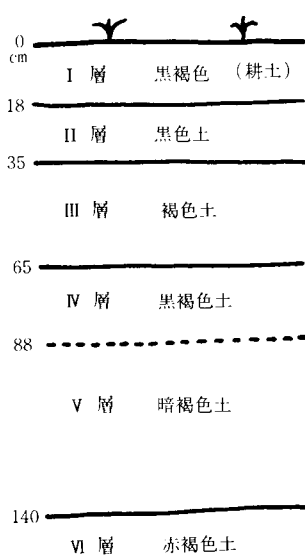
〔事例2〕熊本県榊島遺跡の包含層 (緒方一九七五)

榊島遺跡は、熊本県上益城郡益城町大字島田に所在する。

榊島遺跡は、約一〇〇〇㎡の広い面積の開地遺跡の第Ⅳ層出土遺物を垂直的・平面的に原位置をおさえ、遺跡における遺物の在り方、遺物の組み合わせを考慮して、遺跡の性格を把握する目的をもって調査・整理された特筆すべき遺跡である。

特に、出土した土器の接合関係を整理し、包含層の性格を平面的な在り方によって追求しようとしているが、包含層内における遺物の組み合わせ・遺構(炉穴)の年代把握は、包含層の垂直的構造から求められているのでここで紹介し、平面的考察の部分は後述することにする。

榊島遺跡の層序は、第4図のとおりである。榊島遺跡では、第Ⅳ層に塞ノ神式土器(一一七片)と円筒形条痕文土器(二五〇片)が包含され、さらに、これらの土器片の垂直的出土位置は、上・下からくまなく出



第4図 榊島遺跡の層位 (熊本文報(18)1975より)

黒土

土し、上層と下層のものが接合する場合もある。そして、下層の第V層に掘り込まれた炉穴からは、二片の塞ノ神式土器と二〇片の円筒形条痕文土器が出土し、この炉穴の木炭から九三二〇±一八五年BP（九〇六〇±一八〇年BP）のC年代測定値が得られている。

報告者は、このような遺物の「在り方」を重要視して遺物の共伴性とかれ、これまでの様式論編重に疑問をなげかけている。

〔事例3〕溝辺町石峯遺跡の包含層（河口一九八〇）

石峯遺跡は、鹿児島県始良郡溝辺町麓石峯に所在する。

石峯遺跡は、昭和四一年に河口貞徳氏によって発掘調査がおこなわれ、

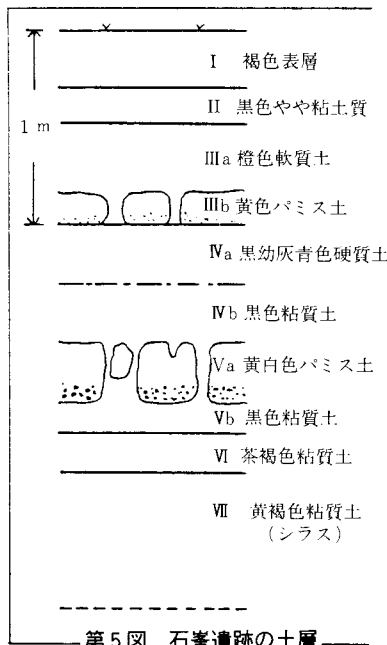
「石峯式土器」と呼ばれる特殊な押型文系の土器が出土し注目された遺跡である。その後、九州縦貫自動車道建設に伴って発掘調査がおこなわれ、旧石器時代から縄文時代早・前期を中心に多大の成果が得られた。

石峯遺跡の層序は、第5図のように区分されている。Ⅱ層は、黒色の粘質を帯びた火山灰で通称黒ニガと呼ばれる霧島山系の火山灰に比定されている。Ⅲ層はアカホヤ火山灰に比定され、a・bの2つに細分される。Ⅲa層は、軟質の火山灰層で縄文時代前・中・後・晩期の土器を包含している。Ⅲb層は、ブロック状に固く堆積したアカホヤ火山灰（A<sub>h</sub>）のパミス層で無遺物層である。Ⅳ層もa・bの2つに細分される。Ⅳa層は、約三〇cmの厚さの黒効灰青色の硬質土で平椀式土器を主に出土している。Ⅳb層は、約三〇〜四〇cmの厚さで縄文土器が包含されている。Ⅴ層もa・bに細分され、Ⅴa層は、薩摩火山灰（Sp）に比定される。Ⅴb層は、黒色粘質土で細石器の包含層である。Ⅳ層も細石器の包含層である。

以上、石峯遺跡の層序を概略で説明したが、はじめに述べたように、これまでの開地遺跡の包含層の発掘調査においては特に慎重な調査方法がとられ、精密な整理報告がおこなわれている。その垂直的な遺物の動態の一部は、第1表に引用したが、「土器層位別頻度表」は、石峯遺跡における土器の垂直移行の実態を示すものであり、「土器移動表」は、石峯遺跡における垂直・水平移行の状況を示すものである。

この石峯遺跡の整理方法は、これまで縄文研究にとりくんでこられた河口貞徳氏の開地遺跡包含層の解明のための大成といふべきものである。

そして、この石峯遺跡の整理結果から河口氏は、  
「従来、遺物は本来の位置から上方へ移行することはあっても、



第5図 石峯遺跡の土層  
(鹿県埋文報(12)1980より)

第1表 石峯遺跡の土器層位別頻度表

挿図番号	69	70	81	80	80	71	79	70
遺物番号	1	3	34~39	31・33	32	5	26~29	4
層位	連点鋸歯文 (円筒形)	摺糸文 (復元完)	摺糸文	石坂式	石坂式 (把手)	石坂式 (復元完)	吉田 (口唇刻目なし)	凸帯摺糸文 (復元完)
表						1		
I			2			1		
II						1		
III	上	1		1		1		
	中			1				
	下			1		2		
IVa	上	5 13	1 1	7 11	1 5	1 14	1 11	
	中	2 5	8 8	16 26	1 5	2 29	3 9	2 22
	下	1 3	11 11	9 15				1 11
IVb	上	4 11	43 43	15 24			12 35	1 11
	中	21 55	37 37	15 24	19 86	3 43	16 47	3 33
	下	2 5			1 4	1 14	3 9	1 11
V	3 8	1 1						
計	39 (38)	10	67 (62)	22	7	40 (34)	11 (9)	37

下方へ沈下することはない、と考えられていたようであるが、第8表(第1表に一部を引用した)に示された各個体・各型式の垂直分布の状況を見ると、とうてい下方への移行は否定することができない。(河口一九八〇)と述べられ、その原因については、地殻の変動など種々考えられるであろうが、砂兵上の実験結果から風力による沈下も一因と考えられている。その結果、

挿図番号	89	76	76	91	91	92	79	92
遺物番号	132・133 139 他	15	14	173・174 177-186	1 87	1 93	25	199-203
層位	平 楯	塞ノ神 A a (小)	塞ノ神 A a (小)	塞ノ神 (無文)	塞ノ神 A a	刻目細隆帯	円筒形 (貝縁厚痕文)	無文
表				1				
I				2				
II								
III	上	2	1	1		1		
	中	3		6				
	下	8		5		2		1
IVa	上	13 32	5 83	17 23	35 38	7 41	1 17	3 30
	中	19 46	1 17	30 41	30 33	1 100	7 41	2 33
	下	9 22		24 32	22 24		3 18	1 17
IVb	上			2 3	2 2		1 17	1 10
	中			1 1	3 3		1 17	1 10
	下							
V								
計	57 (41)	7 (6)	80 (74)	106 (92)	1		6 (17)	11 (10)

(鹿県埋文報(12)1980より一部を抄録)

「自然的原因に基づいて遺物が上下の幅をもって出土する以上、編年のために遺物の本来の位置を明らかにすることが必要である。そのためには遺物埋存の状況を、より事実近くに近く把握することが第一要件である。遺物の出土状況を示す実測図・写真は有力な資料であり、第8表、第9表(第2表に一部を引用した)は、遺物の埋存状況を数量的に示さんとしたものである。これらの資料を総合して、

遺物本来の位置を推定し、第8表に当該位置を○印で示した。」(河  
口一九七〇)として、石峯遺跡の調査結果を報告されている。

②アカホヤ火山灰(K-Ah)上位の包含層

アカホヤ火山灰層の上位の包含層は、一部の地域(指宿地方など)を  
除いて次の火山灰などで強固に密閉されることがないため、長期間地表  
に露呈されていたことが相定される。そのためか、アカホヤ火山灰層上  
位の包含層には、縄文時代前期以降晩期までの土器形式が含まれる場合  
が多い。

しかし、アカホヤ火山灰に続く火山灰(池田湖軽石層や開聞岳火山灰  
層など)の降下地域では、  
今後、包含層の時期を限定  
する事例が増加する傾向に  
ある(成尾一九八三)。

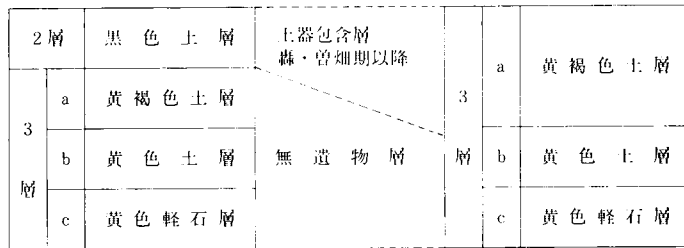
ここでは、アカホヤ火山  
灰層上位でこれまで確認さ  
れた包含層の状態を知る事  
例について紹介してみた  
い。

〔事例4〕西之表市下剝峯  
遺跡の包含層(新東一九七  
八)

下剝峯遺跡は、県営ほ場

	色 調	下 剝 峯 遺 跡
I	耕 作 土	○ (20cm)
II	a 黒色 砂質を含む	(10cm) ○ 弥生中期土器
	b 黒色 粘質を含む	(15cm) ○ 条痕文・凸帯文・沈線文 区別が難
III	a 褐色 軟質	○ (20cm)
	b 黄褐色 硬質(粘質を含む)	
	c 黄褐色 軽石	
IV	灰褐色 + 乳白色	○ (20cm) 吉田式土器 貝殻文土器
	黒褐色粘質	○ (20cm)
VI	桃白色(基盤)	○ ↓

第6図 下剝峯遺跡の層位  
(西之表市埋文報1978より)



種子島(指宿・下剝峯等) 本土(上焼田・桑ノ丸・加栗山等)  
第7図 アカホヤ火山灰(K-Ah)火山灰(上)層の土器包含層準関係  
(新東1980より)

整備事業に伴って発掘調査された縄文時代早期および前期や弥生時代中  
期を中心とした多くの遺物を出土し、層位的に多大の成果が得られた遺  
跡である。

下剝峯遺跡の層序は、第6図に示すとおりであるが、鬼界カルデラに  
最も近い種子島・屋久島地方においてアカホヤ火山灰の下層から最初に  
縄文土器を確認し発掘調査された遺跡として評価される。

さらに、ここで特筆したいのは、  
アカホヤ火山灰上層の包含層の実  
態であり、特に、南九州本土との  
同時期の包含層との相互関係が、  
縄文文化の自然環境にも起因する  
可能性が考えられるのでとりあげ  
ることにした。

下剝峯遺跡は、アカホヤ火山灰  
の噴出源である鬼界カルデラに隣  
接することもあり、五〇〜六  
〇cmの厚いしつかりしたアカホヤ  
火山灰層で下位の縄文包含層を密  
閉している。アカホヤ火山灰は、  
a b cの三層にきれいに分層さ  
れ、噴火の一輪廻を呈している。  
アカホヤ火山灰層上位の包含層  
は、発達した黒色腐植土層内に形



成されている。この包含層（Ⅱc）からは、刺突文・沈線文土器の南島系土器を一部含むが、その他は、轟式系の条痕文土器、沈線文土器、凸帯文土器のほか、縄文系の土器が出土している。そして、その上部は弥生時代中期の包含層（Ⅱe）によって区分されている。このⅡ層とⅢ層の境界については、漸移的な部分のみられるが、層質は明らかに異っており、出土遺物の混在は見られない。

Ⅱ層は、土壌学的にはⅢ層の成分であり、Ⅱ層の腐植化されたものと考えられる。

この包含層の出土遺物は、若干時間の中は相定されるが、ほぼ、伴出遺物から縄文時代前期を中心とすることが考えられる。特に、注目すべきことは、縄文時代前期の包含層が、Ⅱ層の黒色腐植土層中に存在することである。同様な例は、隣接する指辺遺跡でも確認されている。

このように、種子島地方においては、アカホヤ火山灰層が安定し、その土壌を母胎に黒色の腐植土層が非常に発達し、その腐植土層中に縄文前期の包含層が形成されている。

すでに指摘したように（第7図 新東一九八〇）、南九州本土のアカホヤ火山灰上位の縄文時代前期包含層は、アカホヤ火山灰上層の黄褐色土層中に存在しており、これが、種子島地方と本土との自然環境による植生の発達の違いに起因するものか興味ある事実である。

【事例5】横川町中尾田遺跡の包含層（新東一九八一）

中尾田遺跡は、鹿児島県始良郡横川町中ノに所在する。

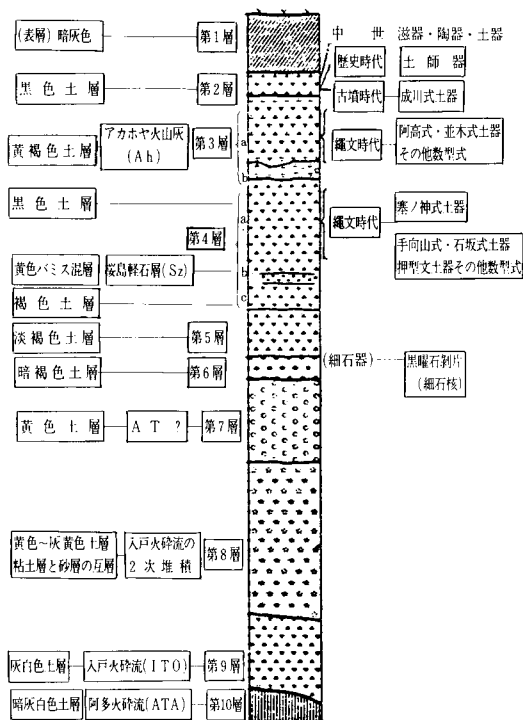
中尾田遺跡は、九州縦貫自動車道建設に伴って約六〇〇㎡におよぶ面積の発掘調査がおこなわれ、縄文時代早期・中期、および中世山城を

中心に注目すべき遺構・遺物が発掘された遺跡である。

遺跡は、アカホヤ火山灰層下位（4層）に、手向山式土器を中心とする厚い包含層が存在し、多量の遺物と集石（10）・炉址（3）などの遺構が検出された。さらに、アカホヤ火山灰層上位（3層）には、阿高式土器を中心とした土器包含層が存在している。そして、最上部には、中世の山城が構築され、建物・柵・土塁・隧道など多種類の山城遺構が検出された遺跡でもある。

アカホヤ火山灰層下位の包含層（4層）については後述するので、ここでは、アカホヤ火山灰層上位の包含層（3層）と山城遺構の構築の関係で、注目すべき残存状態が検出されたので紹介しておくたい。

中尾田遺跡の基本的な層序は、第8図のとおりであるが、アカホヤ火



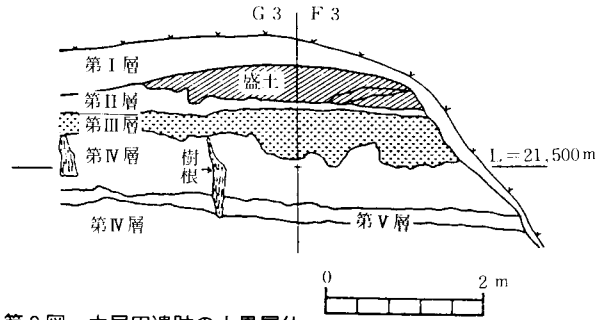
第8図 中尾田遺跡の層位 (鹿児島埋文報 (15) 1981より)

山灰層（3層）の上に形成された黒色腐植土層（2層）に興味ある層形成が確認されている。

遺跡内においては、一般的には第3a層上面に表層となる。しかし、山城遺構の土塁や盛土の構築された部分の下位には、土師器や成川式土器（古墳時代）を包含した黒色の腐植土層が形成されていた。この堆積状態については、次のような発掘調査の見解がある。

「D-6区を中心に中世山城時の造成盛土面が存在するが、その下層に黒色土層が存在する。この黒色土層は色調・胎土とも2層に類似するが成川式土器のみが存在した。これままで、溝辺台地付近を中心とした遺跡

の成川式土器の包含層は、赤ボッコ層上部（本遺跡3a層上部）に入りこむ状態と理解されるきらいがあったが、包含層形成後（中世ごろ）他の層（火山灰や人工的盛土）の堆積によって被られ保護された成川式土器の包含層は、黒色有機質の腐植土層であることが判明した良好な層位資料を得た。このことから、本遺跡の2層（黒色土）中には、成川式土器と土師器を包含することになるが、両者が重複し、あるいは相伴して出土する部分は見られない。」（新東一九八一）



第9図 中尾田遺跡の土層層位

（鹿県埋文報（15）1981より）

このように、中世山城（十六世紀ごろ）の遺構（土塁や盛土）によって被られた部分では、中世遺構の構築によって、それまでの堆積層を保存する形となった。

中世の人工的な密閉であるが、火山灰層堆積と同様、それ以後は、下部の堆積層の保存となり、堆積層の復元が可能な資料を与えてくれることになった。

以上、アカホヤ火山灰層の下位から上位にかけての縄文包含層の垂直的な状態を知る遺跡について紹介したが、ここでは、各遺跡の報告者の見解を紹介するだけにとどまり、包含層の構造についての展開は、後述することにする。

#### 四、縄文時代包含層の平面的な実態

ここでは、無遺物層（火山灰層など）などによってある程度限定された時期の包含層内における遺物の平面的な動きについてみてみたい。実際、各土器形式が平面的にどのような形で検出されるか、包含層の構造を知るうえで非常に大切なことである。

縄文時代の研究では、遺構等が少ないこともあって包含層の調査に力が注がれ、そして、時代の把握が可能な土器型式に主力が注がれ、さらに、調査面積の限界から垂直的な考察に重点がおかれる嫌いがあった。

しかし、遺跡の復原にあたっては、包含層内に検出される土器片が、包含層が形成される過程においてどのような経過を得たかを知るには、

平面的な考察が重要と  
考えられる。

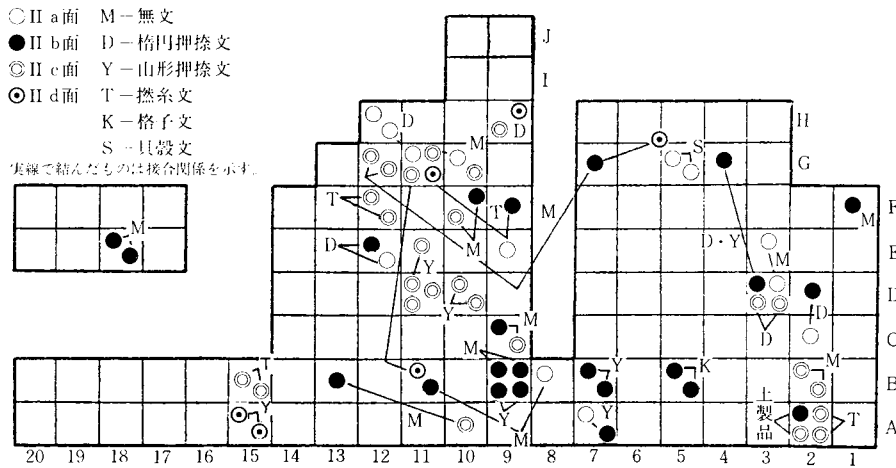
ここでは、包含層内の  
出土遺物の平面的な  
実態が報告された遺跡  
について紹介してみたい。

〔事例6〕大分県稲荷  
山遺跡の包含層（橋一  
九七〇）

稲荷山遺跡は、大分  
県杵築市守江稲荷山に  
所在する。

稲荷山遺跡は、昭和  
四二年に発掘調査がお  
こなわれた遺跡で、表  
層直下のⅡ層に縄文時  
代早期の押型文土器を  
主体とした包含層をも  
つ遺跡である。

稲荷山遺跡の発掘調  
査は、可能な範囲の全  
面発掘を実施し、遺跡



第10図 稲荷山遺跡の接合土器の出土状態 (橋 1970より)

の完全露出による平面的構成および層位的な把握から当時の生活を復原  
すべく取扱まれたものであった。この時期において、このような目的で  
おこなわれた発掘調査は、開地遺跡における発掘調査方法の先駆的役割  
を果たしている。

発掘調査は、一〇×二〇mの二〇〇㎡の面積で、Ⅱ層包含層の層位的  
な把握を行うために五cm掘りによる発掘がおこなわれている。各面は、  
a b c dの四面に区分されている。そして、発掘時の一点一点の調査記  
録を駆使して接合関係の観察がおこなわれている。五千点を上回る土器  
片を平面的な各面（Ⅱ a、Ⅱ b）ごとに接合を試み、次いで、層位的な各  
面と他の面について同じ作業をくり返し、三〇組の接合関係が得られて  
いる。その結果、接合関係については、

「一略—三〇組の土器片どうしの接合のうち、一七組は同一面におい  
て、そして他の面にまたがって接合した土器片は一〇組を数えた。  
量的には僅か一〇組であるが当遺跡の包含層の把握に重要な示唆を  
与えるものと思われる。」

として、次に、稲荷山遺跡の調査成果については、

「まず稲荷山遺跡の編年の位置については、五cm掘りによる層位的  
な把握を基礎に、包含層の堆積状況、土器の層位による形態変化、  
さらに土器片の接合等の詳細な検討の結果、時間的にある限られた  
時期、すなわち押捺文土器文化のある一時期—早水式と田村式の移  
行期—という結論を得た。」(橋一九七〇)

と考察されている。

つまり、土器型態の把握のうえに、遺物の平面的な出土状況を根拠に

包含層の同時性を解かれている。

〔事例7〕熊本県櫛島遺跡の包含層（緒方一九七五）

櫛島遺跡の概要については、「事例2」ですでに説明したので省略し、平面的な調査結果について紹介する。

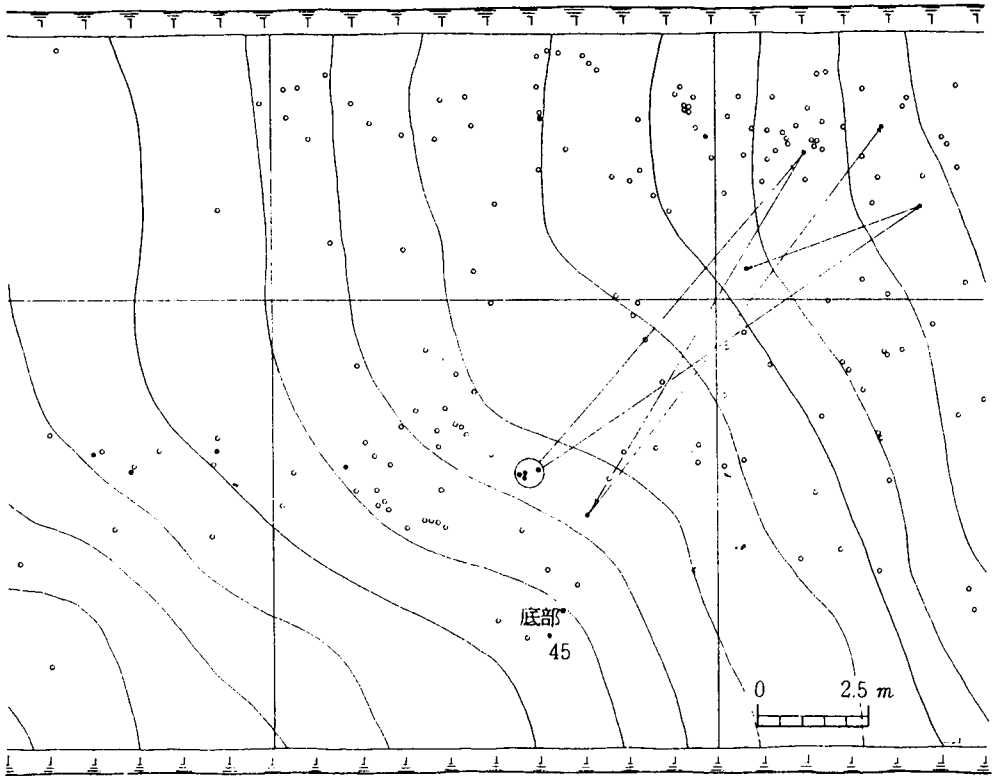
櫛島遺跡では、アカホヤ火山層下位の包含層（4層）に塞ノ神式土器と円筒形条痕文土器が出土し、発掘調査にあたってすべての出土土器の原位置が記録されている。

そして、円筒形条痕文土器については、粗豪で個体識別が困難であったため良好な接合資料は得られていないが、土器片の文様・器形に特徴があり個体識別が比較的容易な塞ノ神式土器については、接合復元が試みられている。その中で、完全に接合するものが一四例確認されている（第11図）。接合距離が最も離れているものが二七mで、つづいて一五m、八m、六mとなっている。さらに、調査区域が限定されるため、未調査の地域に及ぶことも考えられる。調査者は、先の垂直的（層位的）な「在り方」に、この接合状態の平面的な「在り方」を考慮して、塞ノ神式土器と円筒形条痕文土器の共伴を述べられている。そして、

「微視的視点に立って土器形式の細分も必要な作業であるが、併せて各遺跡における在り方、土器の組合せの相違こそ重要である。それは地域性、その地域の土器文化を考える上に無視することが出来ない事実であるからである。」（緒方一九七五）と結んでいる。

〔事例8〕西之表市下剝峯遺跡の包含層（新東一九七八）

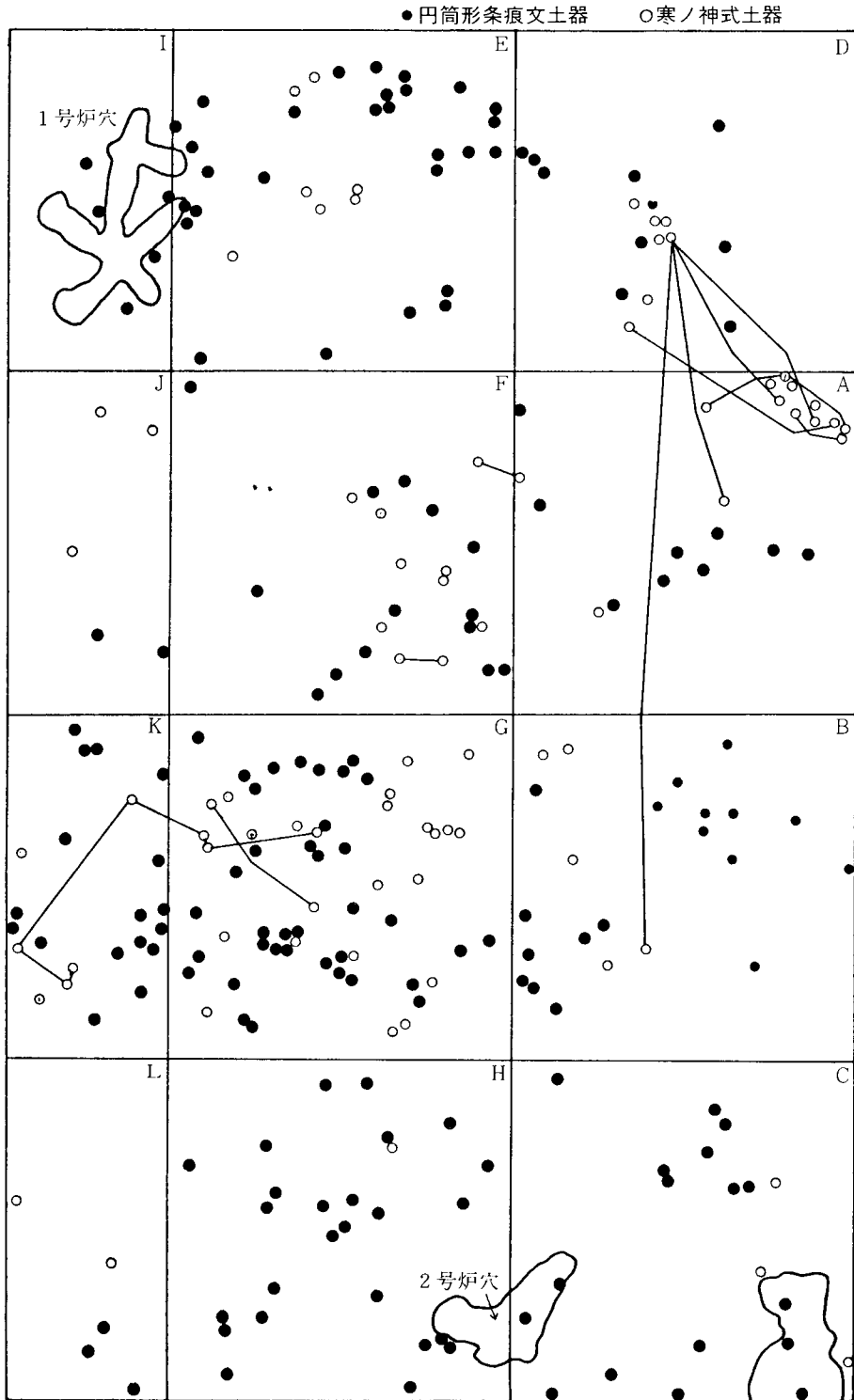
下剝峯遺跡の概要についても、「事例4」で説明したので省略し、平面的整理で得られた資料について紹介する。



(→印に接合)

第12図 下剝峯遺跡の接合土器の出土状態

（西之表市埋文報1978より）



第11図 榊島遺跡の接合土器の出土状態 (熊本県埋文報 (18) 1975から作図)

下剝峯遺跡では、アカホヤ火山層下位の包含層(Ⅳ層)に、二片の吉田式土器(本遺跡Ⅰ類土器)を含んで、これまで類例のない多量の具殻文土器(Ⅱ類土器)が出土した。これからは、器形の特徴はほぼ同形であるが、文様の施文に若干の違いがみられたため、a b cの三つに細分した。Ⅱb類に属するほぼ完形に復元された土器の接合関係を整理し図化(第12図)している。この土器は、文様・胎土・色調に特徴があり、同一個体片は類別することが可能であった。●印が同一破片であり、円で囲んだポイントの部分が底部から胴部の大きな破片が集中して出土しており、土器出土の中心と推定される。

接合関係は、実線で示したが、最も離れたところで1mを計り、同一破片は20mの範囲におよんでいる。出土分布の状態から、末調査部分にもかなり拡がることが考えられる。

ただ、この土器の中心と考えられる円で囲んだかなり大きな破片の集中するところより、接合する小破片がコンターの高いところに位置するという興味深い現象が確認された。

〔事例9〕溝辺町石峯遺跡の包含層(河口一九八〇)

石峯遺跡の概要についても、「事例3」ですでに説明したのでここでは省略し、平面的な調査方法について紹介する。

石峯遺跡の遺物の平面的な動きは、「土器移動表」(第2表にその一部を引用した)として各土器型式ごとの詳細な記録が記載されている。

この表は、次のような分析にしたがって記載されている。

「拡散度」は、一型式の一個体の土器が、一〇m四方の区画を1として、拡がった範囲を数字で示してある。例えば、拡散度5区画の拡がり

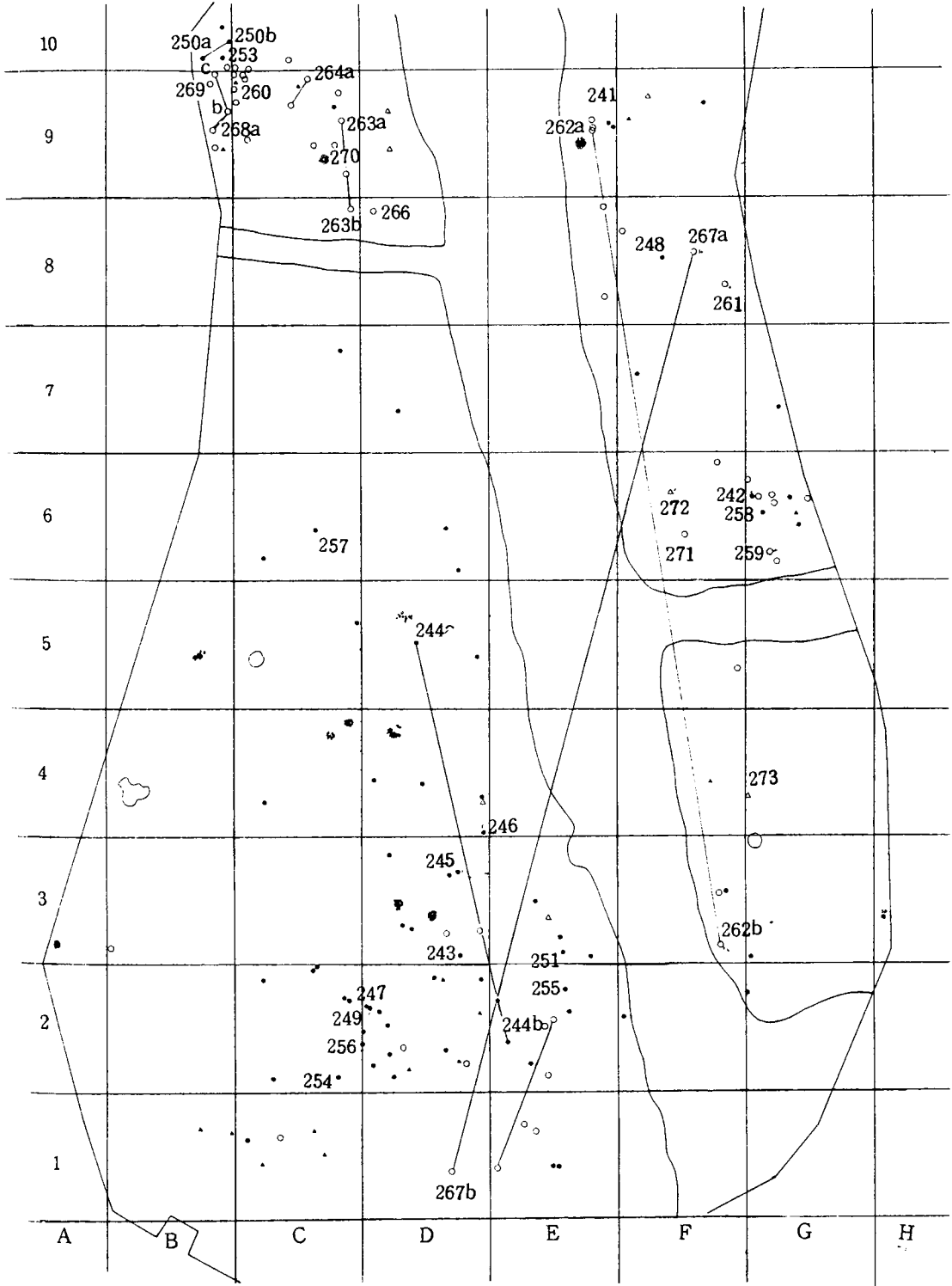
をもつもので、その出土区については、「出土状況」の覽に記載されている。

「移行度」は、一型式の一個体の土器片が、上下に移行した割合を地層の教で示してある。これは、「事例3」で引用した第1表の「土器層別別頻度表」を対比してみれば理解できる。むしろ垂直的な実態を示している。

第2表 石峯遺跡の土器移動表(4層)

挿図番号	71	72	72	71	69	74			
遺物番号	5	7	8	6	2	11			
完・否	完	完	完	完	完	完			
型式名	石坂	楕円形押型	菱形押型	円筒形条痕	手向山	平楕(小)			
拡散度	5	1	7	2	4	1			
移行度	4	1	5	4	5	4			
集中度	1	層	Ⅳb中	Ⅳa~Ⅳb	Ⅳa上	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下
		%	47	100	38.5	50	48.7	49	
	2	層	Ⅳb		Ⅳa上		Ⅳa下	Ⅳa下	Ⅳa下
		%	32		45		54	69.2	
出土状況									

(鹿県埋文報(12)1980より一部を抄録)



(縮尺 = 1 / 500)

第13図 中尾田遺跡の接合土器 (第9g・h類) の出土状態 (鹿県埋文報 (15) 1981より)

「集中度」は、一型式の一個体の土器片が、破片として移行した結果、最も多く土器片が残留する層の土器片の数を%で示したもので、1は、個体または型式の総片数に対する%であり、2は、最も多く集中した区画内の土器片のうち、最も多く集中した層に残留した土器片の数が、同区画内土器片数の総数に対する割合を%で示したものである。

石峯遺跡のこのような分析は、包含層の構造解明の問題意識をもって発掘調査をおこなったうえでの綿密な分析であり、包含層内の土器の在り方が一目瞭然に理解できる方法である。

#### 〔事例10〕横川町中尾田遺跡の包含層（新東一九八一）

中尾田遺跡の概要についても、「事例5」ですでに説明したので省略し、平面的な調査について紹介する。

中尾田遺跡の縄文時代の包含層は、第8図で示したとおり、アカホヤ火山灰層下位の4a層と、アカホヤ火山灰層上位の3a層に存在する。

約六〇〇㎡の広い調査範囲で、出土器型式は、一〇型式類に類別され、各々の土器片は原位置で記録してある。

報告書では、出土器型式は各型式ごとに一頁のグリッド配置図（縮尺五〇〇分一）に番号で原位置にドットをおとし、土器実測図番号と対比できるように配慮した。接合資料は、番号と番号を実線で結んで示した。また、個々の土器片の特徴やレベルは、一覧表に記載してある。

最も距離が離れた接合資料は、9f類の七五mが確認されている。つづいて9h類の七三m、9e類の六二mなどがある。

また、アカホヤ火山層上位の縄文中期の包含層（3a層）でも同様な記録をおこなったが、I類土器が三一m、II類土器が二八mが、最も離

れた接合資料であった。

中尾田遺跡は、他の遺跡に比べて遺跡全体の傾斜が強いためこのような結果が出たことも考慮される。

#### 五、南九州の縄文時代包含層の構造

包含層の実態を知る6遺跡10事例を紹介したが、いずれも包含層の構造を理解するうえにおいては重要な遺跡である。

包含層内の出土遺物の分析結果は、報告者によって異った見解もみられるが、調査の段階から整理の段階に致るまで資料の精緻な記録の中から生まれたものである。

発掘調査の増大している現在、縄文時代の発掘調査も多いが、このような分析までおこなった遺跡は以外と少ない。

ここでは、6遺跡10事例の実態から、縄文時代の包含層の構造について追求してみたい。

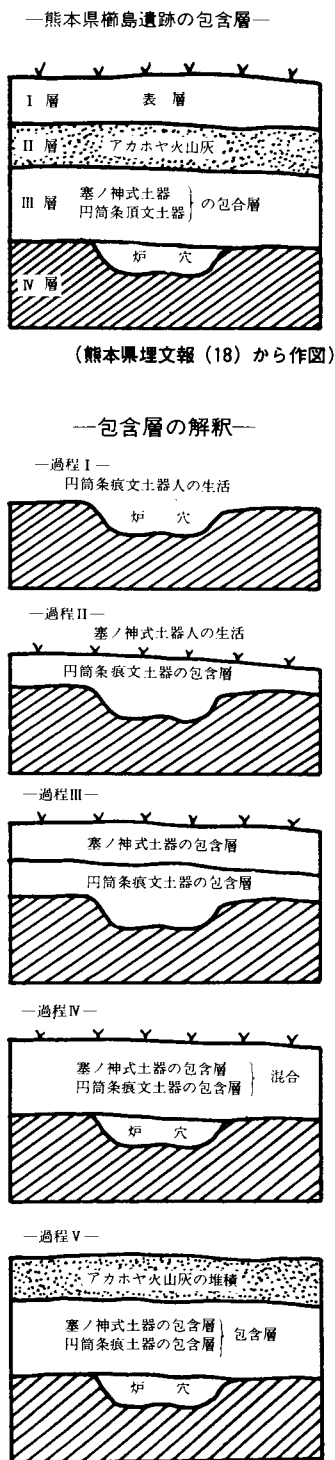
##### ①アカホヤ火山灰層下位の包含層の構造

南九州の縄文時代の包含層は、アカホヤ火山灰層を境に、下位と上位に大きく2つの包含層にわけることができる。まず、アカホヤ火山灰層下位の包含層から、遺跡の発掘調査で得られた包含層内の分析をもとに検討してみたい。

包含層内での遺物の垂直的な実態は、事例1から事例3で理解できるように、四〇cmから五〇cmにおよぶ厚い包含層内で、上下にくまなく多



第14図 熊本県櫛島遺跡の包含層と解釈



数の型式の縄文土器が発見されている。また、これらの遺物の平面的な拡がり、事例6から事例10でわかるように、同一個体や接合資料はかなり広い範囲で確認されている。これが、アカホヤ火山灰層下位の包含層の出土遺物の垂直的・平面的な実態である。現在のところ、この包含層の中から得られる数多くの土器型式の編年位置は、土器型式の形態分析とともに包含層のあらゆる分析によって検討されなければならない。

事例1・2とは、垂直的・平面的からみあいから出土する土器形式は、同時性・共体性が指摘されている。

事例3では、長年の発掘調査の結果をもとに、土器の垂直・水平移動の原因の究明のための処理法として、「土器層位別頻度表」「土器移動表」によって分析をおこない、個々の土器型式の包含層内における本来の位置の追求がおこなわれている。

まず、櫛島遺跡の包含層の構造について検討してみたい。最初に、櫛島遺跡の包含層から出土した塞ノ神式土器と円筒形条痕文土器の二型式について考えてみたい。

塞ノ神式土器は、鹿児島県では土器形態の編年上からみると、アカホヤ火山灰層下位の包含層から出土する土器型式の中では最も新しい位置におかれている。加世田市椿ノ原遺跡や溝辺町桑ノ丸遺跡においては、この包含層の最上部に塞ノ神式土器の独立した包含層が確認されている。さらに、霧島山麓周辺では、アカホヤ火山灰層の直下に新しい火山灰層(牛のスネ火山灰)が存在し、その中に塞ノ神式土器が包含されることが明らかにされつつある(注3)。

また、円筒形条痕文土器は、鹿児島県では、塞ノ神式土器の下位から出土し、形態的にも塞ノ神式土器とは時期差が考えられる。櫛島遺跡では、両土器の2号炉穴出土という事実からも両土器の共存性をとらえられている。

しかし、円筒形条痕文土器は、二〇片という安定した数量であり、塞ノ神式土器は小破片の2片であり安定した状態とはいえない。

このような観点から、櫛島遺跡の炉穴と包含層の形成過程を相定すると次のようになる(第14図)。

まず、炉穴を使用した円筒形条痕文土器人の生活がおこなわれる(過程I)。次に、ここでの生活が終り、移動し、使用した土器は放棄され、風水力などの自然現象で包含層が形成され、炉穴も埋没する。塞ノ神式土器人が移住し、生活が始まる(過程II)。塞ノ神式土器人の生活が終り、移動する。そして再び自然現象によって塞ノ神式土器の包含層が形成される(過程III)。さらに、自然現象によって塞ノ神式土器包含層と円筒形条痕文土器包含層の混合した包含層が形成される(過程IV)。この時、炉穴は、局所的な窪みであったため最初の埋没の状態が続く。次にアカホヤ火山灰層の堆積によって、表面は被られ包含層は保護され(過程V)、その後の自然現象によつては影響は受けなかつた事が考えられる。炉穴の塞ノ神式土器の二点は、過程IVの段階での亀裂などによる混入が考えられる。

炉穴内の木炭片から九千年BPのC年代測定値が得られているが(注4)、このような形成過程を考慮すると、炉穴の年代は、円筒形条痕文土器に近い年代が考えられる。

櫛島遺跡の包含層の形成過程を相定したが、事例6から事例10で示された土器の平面移動の実態から、このような包含層の形成過程は充分に考えられることである。

南九州では、薩摩火山灰層とアカホヤ火山灰層間に狭まれた包含層は、

その間の四五〇〇年から五〇〇〇年の長期間に、このような形成過程を得たことは充分に考えられる。

この形成過程を知る最善の方法としては、現在のところ、事例3の石峯遺跡のような原位置確認の調査方法が要求される。あわせて、桜島東方にみられるような新しい火山灰の発見によつてアカホヤ火山灰層下位の包含層が期待される。

## ②アカホヤ火山灰層上位の包含層の構造

アカホヤ火山灰層上位の縄文包含層については、多くの課題をかかえている。その一は、アカホヤ火山灰堆積以後、大規模な火山灰堆積物が存在せず地表面を被わなかつたことである。その結果、南九州本土の大部分の地域では、アカホヤ火山灰層の上面の黄褐色土層中に古墳時代までの包含層が形成されている。その二は、指宿地方や大隅半島の南部と霧島山周辺に、それぞれ小規模の噴出火山灰が堆積し、微妙な形で火山灰層と腐植土層を形成していることである。その二については、現在、成尾英仁氏の詳細な野外調査によつて火山灰噴出物の分布図が作成されつつある。この小規模な火山灰層の火山灰の認定については、地質学研究者の緻密な分析が必要のため、その結果を期待したい。

ここでは、その一について、発掘調査で得られた実態から、包含層の構造について検討しておきたい。

その一の課題は、すでに指摘したことであるが(新東一九八〇)、南九州本土と種子島において、アカホヤ火山灰層の形成に大きな相違がみられることである(第7図)。

種子島においては、事例4で示したように、轟式土器を中心とする縄文時代前期の包含層が、アカホヤ火山灰層上位の黒色腐植土層中に存在しており、それ以降の包含層も黒色腐植土層中に存在している。同様な例は、隣接する指辺遺跡においても曾畑式土器の単純包含層が黒色腐植土層内に存在している。

しかし、南九州本土では、縄文時代前期から古墳時代の成川式土器までアカホヤ火山灰層上部の黄褐色のボッコ土（アカホヤ火山灰を母胎とする）層内に包含されている状態が確認されている。

特に、溝辺台地周辺では、八世紀末ごろの噴出物と相定され通称黒ニガと呼ばれる霧島山黒色火山灰層堆積までは、アカホヤ火山灰層を母胎とした赤ボッコ土中に遺物が包含されている現状である。

この現状を解釈する発掘調査の好例があるので引用してみたい。

その一例は、溝辺町東原遺跡である（諏訪一九七六）。

東原遺跡のアカホヤ火山灰層上層で、古墳時代の成川式土器を伴う住居址が発見されているが、この成川式土器は、住居址の周辺ではⅢ層の黄褐色火山灰層上部から出土している。住居址には、甕形土器8個、壺形土器1個、鉢形土器4個、埴形土器2個、高坏土器2個の一括資料と考えられる土器が床面に密着する状態で出土しており、住居址に伴うことが考えられる。そして、注目すべきことは、住居址の埋土が暗褐色軟質腐植土火山灰層であり、住居址外の開地で成川式土器を包含するⅢ層とは明らかに異っていることである。この現象は、Ⅲ層上部の成川式土器を包含する層が二次堆積であり、本来の包含層は、住居址の埋土に近い包含層が存在したことが考えられるのである。

同様の例が、事例5で示した中尾田遺跡でも確認されている。

中尾田遺跡では、一六世紀ごろの中尾山城の盛土遺構で被られた部分の下面に（アカホヤ火山灰層の上面にあたる）わずかに発達した黒色の腐植土層中に成川式土器の包含層が形成されていた事実が確認することができた。成川式土器は、アカホヤ火山灰層の黄褐色土層中には決して入りこむことはなく、腐植土層の中から発見されている。つまり、中尾山城を構築する時点では、さほど2次堆積は受けていなかったことにもなり、盛土でその状態を保存して現在に到ったとも解釈している。

このように、アカホヤ火山灰層上位に位置した成川式土器包含層は、若干の植生発達があつたにもかかわらず、発掘時点においては黄褐色土中から検出されるという現状であろう。

この黄褐色土層の最下部（アカホヤ火山灰層下部のパミス直上）から上部にかけては、縄文土器が包含されている。おそらく成川式と同様の過程で、この黄褐色土器中に包含層が形成されたことが想定される。

以上のように、縄文時代前期以降の包含層は、種子島地方においてはアカホヤ火山灰層上位の黒色腐植土層に存在し、南九州本土においては、アカホヤ火山灰層上位の赤ボッコ土層に存在している。

このような現象は、いかなる条件によって生じたものか重要な課題である。

## 六、あとがき

少ない事例と一方的な検討で、縄文時代の包含層の構造について私見

を述べてみた。

現在、考古学の精緻な調査と地質学分野の精力的な研究によって、火山灰と包含層の關係が徐々に解明されつつある。さらに、最近は、縄文時代前期から晩期にかけて關係すると考えられる指宿地方や大隅半島南端の小規模な火山灰のカタログ作りもおこなわれつつある。

火山灰の応用と今後の包含層の構造の分析によって、南九州の縄文文化の実体が解明されるであろう。(一九八四、三、六)

注1、牛のスネ火山灰は、沢村、松井一九五七の「5万分1地質図幅『霧島』地質調査所に記載がある。

注2、加世田市柵ノ原遺跡で下層に吉田式土器が出土。溝辺町桑ノ丸遺跡で下層に前平式土器が出土している。

注3、米満重満氏の鹿兒島考古学会発表資料一九八一年

注4、櫛島遺跡では、1号炉穴で九四一〇±二二五年BP、2号炉穴で九三二〇±一八五年BPが得られる。

(引用文献)

町田洋・新井房夫 一九七六「広域に分布する火山灰」『科学』四十六

成尾英仁 一九八三「南九州における第四紀更新世末期〜沖積世の火山活動」『鹿兒島県考古学会研究発表コメント資料』

成尾英二 一九八四「開聞岳火山噴出物と遺物の關係」——特に初期噴出物と遺物の關係について『鹿兒島考古』(投稿中)

河口貞徳 一九八〇「石峰遺跡」『鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)

大木公彦・早坂祥三一九七〇「鹿兒島市北部地域における第四系の層序」『鹿兒島大学理学部紀要』No.3

吉川博恭・中村真人一九六九「開聞岳噴出の火山灰層のC年代」『地球科学』23

16

緒方勉 一九七〇「熊本県上益城郡御船町干無田遺跡出土の縄文土器」『九州考古学』38

緒方勉 一九七五「櫛島遺跡」熊本県文化財調査報告第18集

新東晃一・立神次郎一九七八「下剝峯遺跡」鹿兒島県西之表市埋蔵文化財調査報告

新東晃一 一九八〇「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『古文化論叢』鏡山猛先生古稀記念

新東晃一・井上秀文一九八一「中尾田遺跡」『鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(15)

橘昌信 一九七〇「稲荷山遺跡緊急発掘調査」大分県文化財調査報告

第二十・二十一合輯

諏訪昭千代・弥栄久志一九七六「東原遺跡」鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告(10)

球科学』No.87

松井健 一九七三「大隅半島笠野原台地のアカホヤ層の噴出年代」『地球科学』No.87